

『建礼門院右京大夫集』と小督事件

——「おましのきりぎりす」の解釈試案——

田 中 政 幸

一 はじめに

『建礼門院右京大夫集』上巻の歌番号62の和歌及びその詞書については、諸注釈書を見ても、明解な解釈がなされていないように、私には感じられる。そこで、非力を顧みず、ここに一試案を提出してみた。大方の御批判をいただき、当該箇所より明確な解釈への一助となれば幸いである。

二 62番歌の位置

さて、問題の箇所を掲げてみよう。

秋のくれ、おましのあたりになきしきりぐすの、声なく
なりて、ほかになきこゆるに、

62とこなるゝ枕のしたをふりすてて 秋をばしたふきりぐすか
な

(本文引用は岩波文庫本による。以下同)

この62番歌の直前にある61番歌は、作者右京大夫と平資盛との恋が生じた、「契りとかやはのがれがたくて、思ひのほかに物思はし

きことそひて、さまぐ思ひみだれしころ」に詠まれた歌である。

また、続く63・64番の二首も資盛との恋から生じた物思いを詠んだ歌と考えられている。次の65番歌は、八月十五夜・九月十三夜以外の秋の月にも美しさを見出した詠歌で、恋の体験とは無関係と、一応は考えられる。66番歌は、人から橘を贈られた折の返歌であるが、贈り主を資盛とする見方もある。そして、67・68番歌は、明らかに資盛との恋に関わる詠歌と見られる。ということ、62番歌は、はっきりと資盛関係の歌と見られる61番歌と67・68番歌とはさまれた位置にあるのだけれど、その内容を見ると、前後とのつながりが不自然な印象を受けるのである。63・64番歌・65番歌・66番歌とともに、その詠歌の背景に資盛との恋があるとみるか否かが問題になっているようである。61番から68番までを一連のものともみるかどうかということになるが、そのことを問う前に、上巻の中の61・68番歌の位置を見てみよう。

右京大夫は、序文の次の上巻巻頭に、高倉天皇・中宮徳子御二人の承安四年元旦の礼装姿を「月日」の光にたとえて詠んだ歌、

2雲のうへにかゝる月日のひかりみる 身のちぎりさへうれしと

ぞ思ふ

この感激と賞讃とに満ちあふれた歌を置いている。その次には、平家一門の榮華を象徴する平家の三女性——建春門院滋子・八条の二位殿時子・中宮徳子——が参集した「ことにかゝやくばかりみえしをり」に詠んだ歌、

3 春の花秋の月夜をおなじをり みるこゝちする雲のうへかな
これを置いている。以下、14番から53番までの題詠歌群を挟んで、60番までの歌は、中宮徳子の後宮に出入りする天皇及び平家の公達や西園寺実宗・藤原隆房等の宮廷貴族達との明るい華やかな社交の折に詠んだ歌を並べているのである。それらには当然のことながら、物思いの陰はない。その陰がつかまとうようになるのは、資盛との恋が始まった61番歌からである。このことは、後にも述べるが、注意しておきたい。

69 番歌は亡き兄のための阿弥陀經供養の折の歌であり、以下、平資盛及び藤原隆信との恋から生じた物思いを詠んだ歌を中心として、ひき続き後宮社交生活の折々の歌が置かれている。途中、123番で「心ならず宮にまゐらずなりにしころ」の、いくら見ても見飽きることのなかった中宮の面影を偲ぶ詠歌を置き、

123 恋ひわぶる心をやみにくらませて 秋のみやま(中宮御所。

筆者注)に月はすむらん

際の一つもった琴を見て、かつての中宮御所での音楽の遊びを「いみじう恋しく思つて詠んだ歌を置き、

124 をりくその笛竹のおとたえて すさびしことのゆくへし

れず

さらに、中宮の御産とひき続く立太子とのことを自宅で聞いて、や

はり、中宮の許に仕えていたかったという切なる思いを詠んだ歌を置いている。

125 雲のよそにきくぞかなしき昔ならば たちまじらまし春の都を
中宮・天皇を「月日のひかり」にたとえることから始まった上巻は、高倉院崩御の折の歌と、

202 雲のうへにゆくすゑとほくみし月の 光きえぬときくぞかなし
き

中宮の悲嘆を推し測つて詠んだ次の歌によって締め括られる。

203 かげならべ照る日の光かくれつゝ ひとりや月のかきくもるら
む

このように上巻に収められた歌は、藤平春男⁽⁵⁾氏のいわれる「高倉院的世界の情趣生活」の折々のことを詠んだ歌が中心ということになる。中でも、14・53番の題詠歌群を一応除いた、2番歌から60番歌までは、中宮付き女房として後宮生活を十分楽しんでる若き日々の作者の姿を彷彿とさせてくれる。恋を知るまでの作者の女房生活は、敬愛する中宮の許で、明るく楽しいものであったにちがいない。そういう作者に恋から生ずる物思いをもたらしたのが資盛であり藤原隆信である。62番歌は、恋の物思いを知り初めた頃の詠歌、61番の次に位置するのである。62番歌の背景には何があるのか。その前後とのつながりはあるのかないのか。それらの点について触れておられる諸先学の方々の御考えを次に紹介させていただきます。

三 従来の解釈諸説

管見に入った限りの代表的な御説を順不同で要所だけ紹介させて

いたたく。

久保田淳氏の説

(前略) 秋が深まると、蟋蟀は床下で鳴くというのが、古典での常識である。(中略) 「秋の暮」に「枕の下を振り捨て」る蟋蟀は、常識に反していることになる。作意は、そのような常識に外れた蟋蟀を、どうしてかしらと疑う点にあるのかもしれない。(中略) 六一の歌とこの歌との間には大きな断絶があるのか、それともつながるものがあるのか、よくわからない。このあと、六三・六四の歌の詞書は「つねよりもおもふ事ある比」と書き出されているが、その「おもふ事」はやはり資盛との恋ではないかと考えるのが自然であろう。とすると、その間に挟ったこの歌も、「物思はしき事」の中で詠まれた、生活感情を反映した歌であろうか。(後略)

糸賀きみ江氏の説

六一・六三は詞書に「さまざま思ひみだれし頃」、「つねよりも思ふことある頃」とあり、六一の「やがて」という表現に見られるように叙景が抒情に連続している。六二も、同じ時期の物思いの状況からの詠出と考えられるが、きりぎりすに託した寓意が不可解である。奔放に振舞う資盛に対する、作者の恋心の動揺かもしれない。(傍線筆者。以下同)

本位田重美氏の説

(筆者注。久保田説ヲ受ケテ) このような解釈ももちろんできると思うが、「とこなるる」「枕の下」「倦きをばしたふ」などのことばから浮かぶイメージは、むしろ人事的なもので、すぐれた女性から離れてえたいの知れない女の許をほつつきあるく

男というものに対する非難の気持を、こおろぎに托して歌っているように思われる。ただ、右京大夫は自分を「おましのあたり」に比するようなおおけない気持を持っていたとは思われないから、これは彼女自身の恋愛体験から出たものではなく、彼女の身辺で見聞するさまざまな恋愛事件から教えられた感想の表現であつたのであろう。

佐藤恒雄氏の説

(筆者注。氏ハ61番歌カラ68番歌マデヲ一連ノモノトサレ、ソノ理由ヲ) 恋の嘆きの始まりから、かれがれになるまでの恋の経過がたどれるような配列がなされていると思われるからである。すなわち、61番歌ではじまった恋は、62番歌で既にかれがらとなり、すぎさつた秋をしたい、63・64番歌では、露のおく尾花や秋の夕暮の空を眺めながら悲しみの涙を流す。65・66番歌では、そのような途絶えがちな関係に慣れ、心の平静をとりもどして月をながめ、応答できるようになり、そして67・68番歌で、とはいえないよいよ「かけはなれゆく」状態が訪れると、くやしきもつらめしくも思われて心を碎く、といったように、恋の進行、起伏を、まるで勅撰集の配列のように綴っているという点において、回想時点における意図的な構成の跡をほの見せているからである。(卜述ベラレ、62番歌ノ下句ニ注意サレテ) この歌は、きりぎりすが一般的な習性に反して、晩秋、床下を離れて他所で鳴いているという事実知的興味を覚えた、それだけの歌であるとは思えない。「きりぎりす」は、先にみた梅や桜やひぐらし(筆者注。210・230・235・236番歌)などと同じ種類の、作者の心が意識した同類であり、分身に他ならず、(誰

もそう読んではないけれど)そこに作者の内面を読みとらな
い読みは、皮相にすぎるであろう。111番歌を考察した際に提示
したのと全く同じ理由で、私はこの歌もまた、資盛との関係が
始まった当初における詠作ではなく、ずっと後年の追懐歌であ
ると思えてならない。(中略)この歌もまた後年の作を、恋物
語めいた一場面を構成しようとする意図をもって、ここに挿入
されたのではなかったか。「秋」への執着は、この場合も尋常
ではない。

以上の四氏の御説のうち、61-68番歌をはっきりと一連のものと
見なされているのは佐藤氏だけである。そして、62番歌の背景に資盛
との恋があるとされるのが、久保田氏・糸賀氏(阿氏はやや消極的)
・佐藤氏ということになり、否定的なのが本位田氏ということにな
ろう。私は、四氏の御説の中では、本位田氏の御説に強く引かれる。
これから述べる私の解釈の試案も、氏の御説に触発されて思いつい
たものである。糸賀氏のいわれる「きりぎりすに託した寓意」を、
本位田氏の御説の傍線を付した箇所を手がかりとして、これから探
ってみたい。

四 作者が見聞した恋愛事件

先に掲げた本文に立ち戻って、まず、詞書の「おましのあたり」
から考えてみよう。作者右京大夫が「おまし」というからには、仕
える主人の中宮徳子の「御座所」の意であることにまちがいはある
まい(本位田氏説の傍線部B参照)。佐藤氏も、「事實は建久末年
に再出仕した後鳥羽院のであってもいいし、さらにその後仕えた

らしい七条院のおましであったかもしれない」と別の可能性を提示
されているけれど、「『おまし』は建礼門院のそれと解釈されるの
が普通であり、作品の展開の中の理解はそれでいい」とされる。
すると、62番歌の初句「とこなる」の「とこ(床)」は、中宮の
「とこ」となる。中宮徳子のそれに「な(慣・馴・狎)る」こ
とのできる男性は、高倉天皇を以て他には存在しない。となると、
「とこなる」枕のした」は中宮徳子を暗示し、それを「ふりすて」
た「きりぎりす」は、当然、高倉天皇を暗示するのだという読み
方ができる。天皇の愛情が中宮を離れて、他の女性に移ったとい
ことになる。本位田氏説の傍線部Aの「すぐれた女性」とは、中宮
徳子に限定できようし、「えたいの知れない女の許をほつきある
く男」とは高倉天皇であると限定できよう。

先に述べたように、2番歌から60番歌までは、物思いの陰のない
明るい華やかな後宮社交の折々の歌であった。作者の生活に初めて
陰が差し込んできた頃の詠歌が61番であった。資盛との恋が始ま
たのである。勿論、資盛がもたらしたのは、恋の悩みだけでなく、
恋の喜びも大きかったにちがいないからうが、同時に隆信とのことも
あったり、糸賀氏のいわれるように、「奔放に振舞う資盛に対す
る、作者の恋心の動揺」もあったであろうから、「さまざま思ひみ
だれ」がちの日々を体験したのであろう。61番の詞書の中にあるよ
うに、作者は「なべての人のやうにはあらずと思」っていたのであ
るけれど、周囲の後宮女房達と同じように、自身も恋の悩みを持つ
ことになってしまったのである。そして、この恋から生ずる陰は、
作者が「月日のひかり」と仰ぎ見た中宮・天皇御二人の間にも差し
込んできたのである。

では、一体、中宮と天皇との間に差し込んできた陰とは、具体的にいえば、何なのか。本位田氏がいわれる、62番歌は作者自身の体験ではなく「彼女の身边で見聞するさまざまな恋愛事件から教えられた感想の表現であった」（傍線部C）というお考えをさらに押し進めてみようと思うが、その前に、作者が見聞して記しとどめている恋愛事件を見ておきたい。

『右京大夫集』には、62番歌の他に、他人の恋愛に関わった際に詠んだ歌が四首見られる。62番の前には54番がある。これは、作者と同僚の中宮付き女房が藤原公衡に言い寄られて、その悩みを作者に訴えてきたのに対して詠んだ歌である。74番は、大炊御門斎院（式子内親王）女房で中将の君と呼ばれる女房が平清経と恋愛関係にあったのだが、まもなく清経が同じ斎院に仕える女房に心交りをしたと聞いて、中将の君を見舞うために詠んだ歌である。この二例は、作者と同じ女房階級の女性と貴族男性との恋愛事件である。もう一つ同じ類の恋愛事件の折の歌に161番がある。『平家物語』巻九で著名な上西門院の女房小宰相と平通盛との恋である。この場合は、小宰相へ詠みかけた歌ではなく、小宰相を通盛に横取りされた男への見舞いの歌である。四首目の185番は、結婚の約束の期日を待ち切れずに、結婚を忌む五月にこそりと女の許へ通い始めたせつちかな男を非難する歌である。以上が、作者の周辺で起きた恋愛事件のうちで、作者が書きとどめているものである。他にも、後宮女房であった作者の周辺では恋愛事件に事欠かなかったであろう。そして、恋で悩み、涙するのは女の側であった。そんな女の様を直接間接に数多く見聞してきたゆえに、作者は「なべての人のやうにはあらじと思」っていたのであろう。

さて、話を中宮徳子と高倉天皇とに戻そう。恋愛事件は他人事ではなく作者自身の身にも起こったけれど、彼女が仕える、敬愛してやまない中宮徳子の身にもふりかかってきたのである。『平家物語』巻六「小督」で、これまた著名な話である。62番歌は、単なる知的興味から詠じられた歌でもなく、資盛との恋から生じた物思いを詠んだ歌でもなく、この小督事件を背景とした詠歌ではないか、と私は考えるのである。62番歌の「きりぐす」、つまり高倉天皇が「したふ」「秋」とは、小督のことではないか、と考えるのである。次には、その考えに至った理由を述べることにする。

五 62番歌の背景は小督事件

高倉天皇の皇妃は、中宮徳子の他に何人確認されているのか。角田文衛氏の「歴代皇妃表」によると、中宮以外に、藤原通子・同殖子（後高倉院・後鳥羽天皇母）・同某女（乳人。功子内親王母）・同某女（濃子内親王母）・平範子（惟明親王母）・藤原某女（小督局。範子内親王母）の六人がいる。しかしながら、角田氏が注記されているように記録には残らなかった女性が他に幾人かいたであろう。

一体、『建礼門院右京大夫集』は、『平家物語』の裏面史⁽⁵⁾・女の書いた『平家物語』などといわれてきている作品なのであるが、中宮付きの女房であった右京大夫が見聞した恋愛事件の中では、この小督事件は特筆に価するものではなかったであろうか。人々の注目を特に集めた事件であったがゆえに、物語化されて『平家物語』にも収録されたと考えられるのである。右京大夫も無関心でいられた

はずはない。事件当時の彼女はどのような状況にあったのか確かめてみよう。

まず、小督事件は史実とされているが、いつ頃起きた事件であるのか。角田文衛氏は次のように、小督について記されている。

承安三年頃、内裏に出仕し、藤原隆房と恋ひに陥る。『宮中一の美人』と称せらる。治承元年頃寵幸され、同年十一月、皇女・範子を産む。その後、出仕せず、治承三年に出家。時に二十三歳。建久年間には、嵯峨の辺に閑居す。

また、富倉徳次郎氏も、藤原隆房の『艶詞』・『山槐記』治承四年（一一八〇）四月十二日条・『玉養』安元三年（一一七七）十一月四日条等を資料とされて、次のようにいわれている。

安元三年十一月に高倉天皇の第二皇女範子を産んでいるのであって、その時二十一歳であったことがわかり、この『艶詞』によつて考えると、隆房との交渉は十八、九歳から二十歳の時のことと判定できるのである。そして彼女が高倉天皇の寵愛を受けたのは二十歳の夏のこと、天皇は時に十六歳であった。

高倉天皇十六歳の時であれば、安元二年（一一七六）ということになる。右京大夫の中宮への出仕期間は承安三年（一一七三）から治承二年（一一七八）秋頃までというのが通説になっているから、小督事件と出仕期間とは重なるのである。しかも、天皇が小督を寵愛した時期の治承元年（一一七七）もしくは安元二年（一一七六）といわれる推定年時の幅は、そのまま作者と資盛とが恋愛関係に入った推定年時の幅に当てはまるのである。2番歌から60番歌までの詠歌は、先に触れたとおり、かげりのない明るい社交生活の折々を詠んだものであった。それが61番歌に至って初めて自分の身にも生

じた物思いを詠んだ歌が置かれている。自分の身に生じた恋に思い悩む日々、それは中宮の許にいた時でも里に下っていた時でもよいが、ふと自分だけの思いに籠っていた心が覚める折々、世評を騒がしている小督事件に注意が向けられる。自分が敬愛する、あんなにすぐれた女性中宮徳子をふり捨てて、あの天皇が、別の女に熱中しているなんて、という思いが62番の詠歌を生んだと考えるのである。おおけないこととは思いつつ、自分の身と中宮の身とをいつい重ね合わせてしまう心情が、当時の作者にはあったのではなからうか。安元二年（一一七六）天皇十六歳ということになると、中宮は推定年齢二十一・二十二歳、作者は通説では二十一・二十一歳、資盛は天皇と同年の十六歳といわれており、それぞれ年下の夫であり恋人であるということも、作者が自分の身と中宮の身とを重ねて見してしまう要因の一つではなかつたらうか。

62番歌が小督事件の折の詠歌とすると、次には、なぜはつきりとした書き方をしなかつたのが問題になる。中宮のこの事件に対する反応が、彼女に制約を与えたのであろうか。しかし、『平家物語』の「小督」では、葵の前を失った悲しみに沈んだ天皇を慰めるために、中宮が小督を差し出したとしている。それは『平家物語』の虚構であろうが、どちらにしても、天皇が小督を寵愛した事実には変りないであろう。『平家物語』の伝えるところによれば、清盛の小督事件に対する反応とその処理とは峻厳なものであったから、平家一門は勿論他の宮廷貴族達の間でも、小督のことを公然と話題にすることは禁忌とされていたのではなかつたか。当時、高倉天皇にはまだ皇子誕生のことがなかつた。安徳天皇は治承二年（一一七八）十一月の誕生である。清盛の激怒の根本原因もその点にあったはず

である。そうした雰囲気の中に、作者もいたのである。中宮付き女房であるから余計に言動には気をつかったらうと思われる。二年程前の出仕して間もない頃、「月日のひかり」と中宮・天皇を仰ぎ見た作者にとってみれば、そのうえ中宮を敬愛する目で見れば、天皇の行動が不可解なものと感じられたのであろう。その不可解さを、「秋が深まると、蟋蟀は床下で鳴くというのが、古典の常識である」という「きりくす」の、常識に反する行動に託して表現していると考えられる。歌の裏の意味は天皇の行動に対する非難となる。作者の後宮女房という立場からは、天皇へのあらわな非難の表現は差し控えるべきことだったのだと思う。

六 右京大夫と小督

さて、小督事件は、中宮付き女房である右京大夫にとって、たいへんに関連の深い事件であったから、彼女の関心が中宮及び天皇の動向に向けられたことは勿論であつたらう。しかしながら、一方の小督への関心も十分にあつたと思われる。それは単に天皇の寵愛を一身に集めている女性というものに對する関心だけでなく、もっと個人的な関心を以前から持っていたのではなからうかということである。『平家物語』「小督」⁽²³⁾では、「此女房は桜町中納言成範卿の御むすめ、宮中一の美人、琴の上手にてをはしける」と小督は紹介されており、また例の著名な、仲国が天皇の意を体して小督を嵯峨野に深し回る場面では、小督の弾く琴の音が重要な役割を演じていることは周知のことであらう。そして、いうまでもなく、右京大夫も父伊行・母夕霧の血を承けて、音楽的素養は十二分に身につけて

いたし、富倉徳次郎氏のいわれるように、「後白河院のとき、二条・六条・高倉三帝の御代は実に音楽の時代であるといつてもよいのであり、この右京大夫の音楽の才は宮中女房としてなかなか重要な才能であつたのである」ということで、同じ宮中女房として、小督に對する関心はかなり深いものがあつたと思われる。對抗意識といつたものもあつたであらう。「右京大夫集」の中では、彼女の音楽的素養をうかがわせるものとして、琵琶の名手実宗との贈答歌（4・5番歌）や高倉天皇の笛にまつわる話（12・13番歌）などがよく引き合いに出されている。

高倉天皇の笛というと、小督と関連のある人物が浮かびあがつてくる。13番歌の詞書に「大納言君」と呼ばれる女房が出てくるが、この女房は、本位田氏によると、中納言実経の女で祖父三条内大臣公教の養女となり、初め高倉院に仕え、後に七条院に仕えて「七条院大納言」と呼ばれた女性、さらに、九州大学図書館蔵本系統の諸本に存する奥書の一節「此本自筆なりけるを七条院大納言⁽²⁴⁾がたきゆかりにてこのさうしを見せられたりけるを」の中の「七条院大納言」と同一人物とされている。本位田氏も引かれている『櫻竹抄』によれば、高倉天皇の笛の師は、公教の次男権大納言実国である。この実国の『月詣和歌集』巻十景傷部所収歌に次のものがあることが、富倉氏によって指摘されている。

高倉院女房さまかへてのちいくほどもなくて院もかくれさ
せ給ひければいひつかはしける

大納言実国

照る月を見すてて出でしことわりは 雲かくれぬる今こそは知
れ

この歌について、富倉氏は「清水浜臣は、この女房に小督を当て

て、実国が高倉院崩御の時小督に贈った歌との推定説（『月詣和歌集』文化五年刊）を述べているが、当たって「いよう」といわれている。高倉天皇の許で、小督の琴と実国の笛とが合わされた折が何度かあったのであろう。天皇と小督との合奏を拝聴する折もあったであろう。そうした折々のことは、天皇付き女房であった「七条院大納言」を通じて右京大夫の耳にも入ってきたと思う。公教の一族は音楽的天分が豊かであったから、「七条院大納言」と右京大夫との間の話題の中心は音楽のことであつたらうと思われる。そして、小督の琴の音を、それぞれ一見識を持った両者の間であげつらうこともあつたのではないかと想像される。

また、本位田氏は、「催馬楽に寄する恋」の詞書を持つ52番歌について、俊成の甥にあたる徳大寺実定家歌合の出詠歌であるとの説を出され、右京大夫と「歌林苑」との関係があつたといわれる。また、「歌林苑」の協力者として可能性のある名の中に、実国・俊成・成範（小督父）などの名をあげておられる。

ところで、小督についての『平家物語』の注釈書等を概観してみると、先に触れた『艶詞』『山樵記』『玉葉』の他では、『建寿御前日記』『明月記』の記事が資料として引用されている。前者は、「小督の承安四年の十八歳の時の姿と失踪出家後二十余年後にふたたびその姿を見た由を伝えて」おり、後者は、「小督四十九歳のころの重病の身を、明月記の筆者定家が訪れた記録である」ということで、建寿御前・定家両者が俊成の子女であることに注意される。

というのは、右京大夫の家と俊成一家との間には密接なつながりがあるといわれているからである。

このように見えてくると、右京大夫にとって小督事件とは、それま

で周囲で見聞してきた恋愛事件とは趣を異にする、特別に関心を持たざるを得なかつたものと考えられるのである。それをなぜ暗示するような形でしか表現できなかったのか。初めに述べたように、上巻は、高倉天皇・中宮徳子を月日と仰ぐ情趣生活を記し止める意図の下に歌が配列されていると認められる。小督事件は、その高倉天皇・中宮徳子を中心とした世界を乱すものである。右京大夫にとつては、その世界の中心は天皇ではなく、やはり中宮であつたにちがいない。だから、特別に関心のある事件ではあつたし、自身の恋との重ね合いもあつて、暗示的にはあるが記し止めたけれど、その内容は天皇の行動を非難するものとなつたのである。右京大夫の心情は、作品全体を通じて、平家方に与するものであつたと考えられる。その点が『平家物語』の姿勢とこの作品の姿勢との差を示すのではなからうか。小督事件の扱いについても、その差がはっきりと出ていると考えられる。『平家物語』における小督事件の扱いは、高倉天皇を圧迫する清盛の専横の最も象徴的な事件として語られている。例えば、次のようないい方もされている。

つまり、天皇や院やその美しき女房たち、その伝統的な人間価値の象徴が、平清盛の新興の威力とひた寄せる時代の新しい波によつて、木の葉のごとく弄ばれ、はかない運命を滅びていった様子を如実に見る思いがするからである。やはり平家物語の「小督」は単なる王朝文学の延長のうえにはなく、転形期の時代の、伝統的人間価値の崩壊を象徴する人物として形象されているのである。

心情的に中宮方に与する右京大夫には、このような小督事件のとらえ方はできなかつたのであろう。自身の恋愛問題と重ね合わせた

天皇の行動への非難あるいは不可解な思いが重きをおいたのである。ただ、その後の小督への同情はあったであらうと思う。

七 付言及びむすび

これまでに述べてきたとおり、私は62番歌の背景に小督事件があると考へている。もう一度、本文に立ち戻つていへば、「とこなる」枕の下」が中宮徳子で、それを「ふりすて」。「秋」つまり小督を「したふ」常識はずれな「きりくす」が高倉天皇ということになる。歌の表の意味と裏の意味とはそれでうまくつながると思ふが、「秋」と小督との結び付きについて、今少し蛇足を付け加えておきたい。

『平家物語』が伝えるように、小督が内裏を抜け出して一時嵯峨野に身を隠していたとすれば、小督と秋、そして、秋と「きりくす」との結び付きが一層強くなる。先に触れた仲国が天皇の命を受けて小督を嵯峨野に探し回る名文は次の一節から始まる。

をしかなく此山里と詠じけん、嵯峨のあたりの秋の比、さこそ
はあはれにもおぼえけぬ。

「をしかなく此山里」は、藤原基俊集の「をしかなくこの山里のさか（筆者注。「性」と「嵯峨」とを掛ける）なれば、かなしかりける秋の夕くれ」を踏まえた表現である。62番歌を右京大夫が詠んだのは小督事件当時と考えられるから、基俊（康治元年1142没）の詠歌を含む和歌の常識として、嵯峨と秋との組み合わせは、彼女の頭の中に入っていたはずである。

また、「秋」「嵯峨」「きりくす」の組み合わせの参考歌とし

て、次の一首を採用してみた。

公時卿母みまかりてなげき侍りけるころ、大納言実国がも
とにつかはしける
後徳大寺左大臣

かなしさは秋のさかのきりぎりす 猶古郷にねをや鳴くらん

（『新古今集』哀傷七八六）

「公時卿母」つまり藤原実国室（中納言藤原家成女）が死去した時期は、『公卿補任』文治五年の公時の官歴を記した所に「承安三正十三正五下（朝勤行幸賞。建春門院御給）。同十一月二日復任侍從（服解。母）」とあるので、承安三年十一月二日以前ということになり、小督事件の起こる二三年前である。この後徳大寺左大臣実定の歌が、小督事件の前に、右京大夫の所まで伝わった可能性はあると思ふ。前段で触れた本位田氏の説によれば、右京大夫と実国及び実定との交流があった可能性が高いからである。

以上、先学の諸氏の御研究の成果によりかからせていただいて、拙い推論を重ねてみただけであるが、はじめに述べたように、わずかもこの作品の研究に益する所があれば、望外の幸である。大方の御叱正を賜わりたく、御願ひ申し上げる。

— 鈴峯女子短期大学講師 —

注（一） 久保田淳氏「建礼門院右京大夫集評釈・五」『国文学』昭和四三年三月学燈社刊。他に、村井順氏「建礼門院右京大夫集評解」昭和四十六年有精堂刊。糸賀きみ江氏「建礼門院

右京大夫集」昭和五十四年新潮社刊、等。

（二） 注（一）久保田氏「評釈」。

（三） 佐藤恒雄氏「建礼門院右京大夫集の成立——新古今集から

の影響歌を起点として——」『言語と文芸』第八七号昭和
五四年三月桜楓社刊。

- (4) 久徳高文氏『建礼門院右京大夫集』昭和五三年重版桜楓社
刊、の「略年譜」では治承二年(一一七八)「この年の
秋、中宮女房退任か」とある。宮仕えをやめた原因につい
ては、注(1)糸賀氏前掲書には「資盛との恋愛が人の噂
になったためとか、或いは母の夕霧が病気でその看病のた
めとかの説もあるが、不明」と注あり。

- (5) 藤原春男・福田秀一氏『建礼門院右京大夫集』とはずがた
り鑑賞日本の古典12昭和五六年尚学図書刊、一〇頁。

- (6) 本位田重美氏『評註建礼門院右京大夫集全釈』昭和五三年
改訂三版武蔵野書院刊、六四頁。「彼女と藤原隆信との交
渉がある程度進行中であつたさ中に、突如として資盛との
縁が結ばれる、そしてそれにもかかわらずなお執拗な隆信
の求愛が続くので、彼女は結局それにも負けてしまふ」と
いった経過があつたとされる。

- (7) 注(1)久保田氏『評釈』。

- (8) 注(1)糸賀氏前掲書。

- (9) 注(6)前掲書。

- (10) 注(3)前掲論文七四〜七五頁。

- (11) 注(3)前掲論文六七〜七四頁参照。

- (12) 氏は下巻々頭歌24番の詞書にある、寿永二年秋の平家西走
による資盛との別離を終生忘れ得ぬ記憶とされ、以後、作
者にとって「秋」とは「秋の別れ」を意味するといわれる。

- (13) 尚、注(1)村井氏前掲書には、「口訳」「語釈」だけ

で、「評」は付けておられない。

- (14) 注(3)前掲論文七五頁。

- (15) 角田文衛氏『日本の後宮』昭和四八年学燈社刊、付録。

- (16) 注(15)の欄外注記に、「(前略)側近に仕うる好ましま
女性にたやすく手をつけられるのは、高倉天皇の性癖であ
つたから、一時的に寵愛された女性は、前記のほかなほ幾
人か存せしものと推測される」とある。

- (17) 注(1)村井氏前掲書。

- (18) 富倉徳次郎氏『平家物語全注釈』中巻昭和四二年角川書店
刊、一八二頁。

- (19) 注(4)久徳氏「略年譜」。注(5)藤平氏「年表」。

- (20) 久徳氏「略年譜」では安元二年、藤平氏「年表」では治承
元年とする。

- (21) 富倉徳次郎氏『王朝の悲歌』昭和四五年弘文堂書房刊、で
は中宮と右京大夫とも同年齢とする。

- (22) 注(1)久保田氏『評釈』。

- (23) 日本古典文学大系本による。以下同。

- (24) 注(21)前掲書二二二頁。

- (25) 井狩正司氏『建礼門院右京大夫集校本及び総索引』昭和四
四年笠間書院刊、による。

- (26) 注(6)本位田氏前掲書三〇〜三一頁。

- (27) 注(18)前掲書一九四頁。

- (28) 注(6)前掲書五三〜五四頁。

- (29) 市古貞次編『平家物語必携』昭和四二年学燈社刊、一三三
頁。

(30) 注(6) 前掲書七六・一〇八―一〇九頁等。
(31) 注(29) 前掲書一二六頁。矢代和夫氏執筆。